

華中特務工作の回想……梶野渡氏インタビュー

愛知大学現代中国学部 教授 三好 章
教授 馬場 毅
大学院中国研究科研究生 広中一成

はじめに

ここに紹介するのは、日中戦争期の華中、特に江蘇省において住民に対する宣撫工作・治安工作、さらに情報工作を主要任務とする特務工作に携わった梶野渡氏の回想である。

インタビューは2009年6月4日午後、8月3日午後の2回にわたり、のべ6時間近く、梶野氏の研究室兼応接室である「悠悠庵」でおこなった。日中戦争の時系列に沿って、馬場・三好・広中の3人が質問し、それに対して梶野氏が答える形をとった。

梶野氏は大正8年、すなわち1919年の9月生まれ、今年2010年には満91歳になられた。御健康で、郷土史家として地元の古蹟や古戦場の研究に忙しい日々を送られ、しばしば市民講座などで講義も行い、ご自分より一回りも二回りも若い「老人大学」の学生たちを叱咤なさっている。今年は、桶狭間の戦い450年ということで、ますますお元気である。記憶力はもちろん、足腰も、眼も耳もしっかりした、まさに矍鑠たる方であった。

梶野氏自身、『知られざる戦史 一兵士の陣中日記』と題する私家版の回想録を出されており、これにもとづいて、講演などを行っている。今回、本学に科目等履修生として私（三好）の講義を聴講なさっていた方のご紹介で、梶野氏にお会いすることができた。先の大戦を、身を以て経験なさった方が少なくなっていく中、今回のように特別な従軍経験をお持ちの方のお話を伺えたことは、幸運であった。

今回のインタビューでは、梶野氏が関わられた「特務工作」、具体的には占領地区の安寧を保つための治安維持工作と、占領目的を理解させ、占領統治に協力させるための宣撫工作が中心的な内容である。なお、「特務

工作」以外にも興味深い内容の事柄¹⁾があったが、今回は内容的にしぼり、琅琊山の醉翁亭碑にかかわるエピソードを最後に付け加えるに留めた。

ここで、宣撫工作について簡単に説明しておこう。昭和13年3月16日付「中支占領地区ニ於ケル宣撫工作概要」²⁾によれば、その目的は「作戦地域内ノ支那民衆ヲシテ今次事変ニ於ケル帝国ノ真意ヲ明ラカニシテ、排日抗日思想及欧米依存ノ精神ヲ排除シ、日本ニ依存スルコト即チ安居楽業ノ基ナルコトヲ自覚セシメルニアル」のであり、「庶民ヲシテ速ヤカニ正業ニ復帰セシメ、生命財産ヲ保證シ、先ツ民心ヲ安定セシメ、秩序ヲ恢復シ、皇軍ノ恩恵ニ信倚セシムルト共ニ逐次抗日ヲ主張セシ国民政府ト離脱シ新政权ノ樹立ニ伴ヒ、之ニ帰復セシメ以テ思想政治経済的二根底ヨリ親日機運ノ醸成確立ヲ期ス」ことにあった。このため、政治工作として住民の調査管理、治安維持会などの組織、難民の救恤など、経済工作として軍票の流通³⁾、さらに教化宣撫工作として中国語⁴⁾による住民への教化、親日紙『新申報』の配布、そして住民への医療活動などをあげている。これらは、時期と場所こそ違え、梶野氏が津浦線沿線の滌縣において行った特務工作と異なるところはない。

なお梶野氏は、2000枚以上の現地の写真をお持ちであり、本稿末にそ

(1) 以下に示した 梶野氏の履歴の中で紹介した、昭和19年1月の八路軍掃蕩戦では、中央軍第三十三師 すなわち重慶政権の国民政府軍救出が一つの目的であり、任務を達成し、中央軍の將校たちに感謝され、また整列して日本軍を出迎えた中央軍に対して「日支提携」「共栄共存」など「共栄圏」について軍曹であった梶野氏が中国語で説き、中央軍は無条件でかれらの拠点に帰還し、別れる時は、かれらは振り返りながら手を振っていたという。この作戦は偶然中央軍を救出したのではなく、師団司令部からの命令に基づくものであった。

(2) 満鉄上海事務所長報「中支占領地区ニ於ケル宣撫工作概要」昭和13年3月16日（井上久士編・解説『華中宣撫工作資料』十五年戦争極秘資料集13）不二出版、1989年12月、48～53頁）。この史料は「満鉄・一九三七年宣撫工作計画」に収められた全10編のひとつである。同史料の引用は、これによる。1937年10月、上海近郊宝山での活動に始まり、38年3月には華中各地に37班、50名に上っていたという。もっとも、これは満鉄が派遣した67人の社員やもと満洲国官吏、東亜経済調査局員、さらに東京拓殖大学出身者および卒業生などからなり、民間人を動員したもので、軍そのものの機関ではないものの、本部班長には中佐クラスが当たっており、当然ながら軍の管理下に置かれていた³⁾。

(3) 前掲「中支占領地区ニ於ケル宣撫工作概要」には、蘇州における軍票の交換高として金票との交換880円、小麦粉との交換49袋で1743円、白米との交換209石3斗で1205円、合計3828円、という数字があげられており、「軍票ノ支那人間ヘ流通ヲ円滑ナラシメル為……万已ムヲ得ザル場合ヲ除イテハ総ヘテ軍票ヲ以テ授受シテ居ルノテアル」（52頁）と、軍票による売買を住民との間で行っていたことが記されている。

(4) 前掲「中支占領地区ニ於ケル宣撫工作概要」では、「支那語」ではなく、「中国語」と記されている。

の一部を掲載する。出所来歴はもちろん、それが撮られたときの状況も確認でき、一つ一つが興味深く貴重な資料的価値がある。



梶野渡氏

梶野氏の略歴を紹介しておく。

梶野氏は大正8(1919)年、前年の米騒動につづき、朝鮮半島での三一独立運動、さらに中国の五四運動という東アジアの一連の変動の年に、愛知県に生まれた。

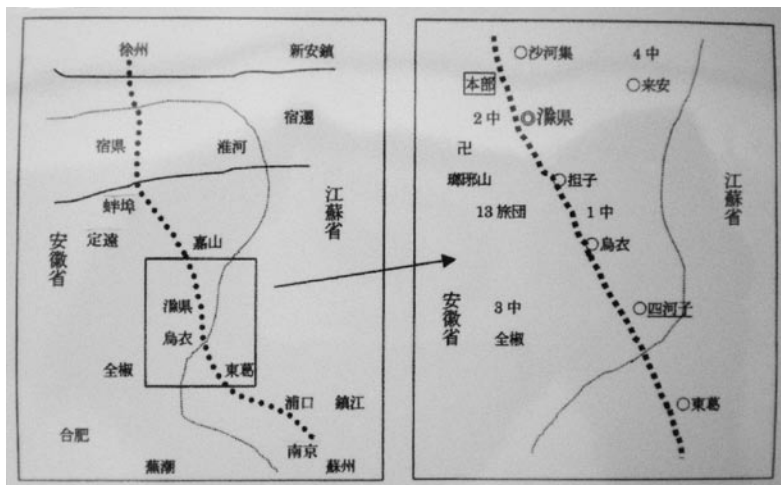
昭和15(1940)年1月、現役兵として召集され、名古屋において独立歩兵第五十六大隊に入営。陸軍歩兵二等兵。そのまま大阪から出帆し、江蘇省浦口、現在の南京市北岸上陸。その後、まず昭和17(1942)年3月の現役満期まで、一兵卒として軍務に服した。その間、昭和16(1941)年5月からは皖蘇省境作戦に参加し、上等兵となっていた梶野氏は中隊長付の伝令の任に当たっていた。そこで、安徽省来安付近の張山集で新四軍第三師と接触し、交戦となり、銃が焼けるまでうち尽くしたが足と腹部に敵弾を受け負傷、さらに近くで手榴弾が破裂するなどしたが、中隊長に戦況を報告するなど任務を遂行、その後、後方に搬送された。腹部の銃創は九分九厘助からないといわれていたものの、安徽省滁県から浦口の療養所に送られ、さらに南京陸軍病院などで約5か月の療養で完治し、10月には原隊復帰となった。

このあと、現地で再度召集されて昭和17(1942)年3月、伍長として安徽省四河子での津浦線の鉄道警備隊長を命ぜられ、滁縣駅での警備を命じられた。そして、その一環として滁縣附近の住民への宣撫工作・治安工作を行った。今回のインタビューの中心となる時期である。その当時「反日感情の高い中国住民に対して、日中友好の大切さを宣伝しても、なかなか耳を傾けては呉れませんでした。それをこちらに顔を向けてくれるようにするのが、兵長の任務でした。夜寝るのも惜しんで働きました」(『知られざる戦史』12頁)という。その間、同年7月には銃撃や手榴弾での攻撃で再び負傷し、南京陸軍病院に入院、加療したが、8月には警備隊に原隊復帰した。それから昭和18(1943)年7月には独立歩兵第五十六大隊本部付きに編入され、宿県に部隊が移動するまで滁縣を中心に警備に当

たった。その後、八路軍掃蕩戦や京漢作戦に参加し、昭和19(1944)年6月徐州にあった師団司令部参謀部勤務となった。同年11月から12月にかけて、初年兵受領のために名古屋に戻り、その時大量の写真を持ち帰られたのである。そして昭和20(1945)年6月、曹長となっていた梶野氏は第六十五師団司令部勤務となり、そこで終戦を迎えた。翌昭和21(1946)年3月、内地に帰還し、帰国後現役満期除隊となった。

梶野氏は徴収を受けて出征したのであり、志願兵ではない。インタビューの中にも出てくるが、志願兵でもないのに足かけ6年以上の歳月を兵士・下士官として中国大陸で過ごされたのである。この間、特務工作、具体的には治安維持と宣撫工作に携わり、住民への働きかけや中国側の情報の収集にあたられたのであり、これだけでも稀有な経験である。そればかりか、作戦行動とは直接関係はないものではあるが、持ち前の歴史への興味と関心から、「醉翁亭碑」という中国の誇るべき歴史遺産を保護し、後世に残すという大きな仕事もなされている。しかし、この石碑は文化大革命中に破壊されたのだが、それを後日「日本帝国主義による破壊」と事実を歪曲し、捏造した中国のあり方にも事実を以て批判を行っている。事は本筋からはやや離れ、しかも現在解決しているものであるが、日中戦争そのものに関しても、個別の事実に基づく検証が多方面で必要であることを、感じました。

なお、インタビューの録音は広中がおこし、それを三好が確認の上、整理を行った。



滁縣付近拡大図（梶野 渡氏作成）

【インタビュー】

入営から最初の負傷まで

広中：入営なされたのは、いつですか。

梶野：1940年の1月です。

広中：その後はどういう経緯をたどられましたか。

梶野：浦口から津浦線に乗りまして、安徽省の烏衣に向かいました。津浦線は北京に行く鉄道なんです。私どもはここから出発して、私は烏衣に入りました。そしてここに私たちの部隊本部がありまして、部隊本部勤務をしまして、そこから今度は師団司令部勤務だということで江蘇省の徐州へ行きました。そこで入営して2ヶ月半の教育を受けました。そこではものすごい教育を受けました。私らは第四十五連隊に入ってしまった。今までその連隊は九州熊本第六師団の管轄でしたが、これを名古屋の第三師団に管轄を切り替えるということになり、私たちが初めて第三師団から行くことになったのです。

馬場：梶野さんが所属していたのはどの部隊ですか。

梶野：独立歩兵大隊です。連隊と大隊との中間で、戦争中にできました。独立歩兵第五十六大隊です。大隊の治安宣伝部の班長をやっていまし

た。やがて情報担当を兼ねるようになりました。連隊に入ると、兵隊たちは「また六」が来たかと騒ぎ始めました。「また六」というのは、「またも負けたか六連隊」とも言い、日露戦争で一番弱かった名古屋の第六連隊のことを意味することばでした。兵隊たちは「また六が来たからたたき直さないといかん」と言って、ものすごくしぼられました。確かに九州の人は強かったです。水筒の中に酒を入れて、それを飲みながら戦闘をしていたくらいです。そういう連中と過ごしていたので私たちは強くなりました。

それからしばらく経った、昭和16年の5月29日、私は弾を6発受けました。場所は安徽省の来安县長山集です。相手は共産軍です。新四軍第三師です。張山集には新四軍第三師の前線司令部があり、私たちも苦労していました。

三好：弾を受けたのは行軍中ですか、作戦中ですか。

梶野：作戦中です。夜明けです。7倍くらいの敵に囲まれて、手榴弾をずっと投げられていました。

私たちは夜中の2時にこの山を占領した後、一個小隊33名がその場に残ることになりました。私は当時、中隊長の伝令をやっていたので、そこに残る必要はありませんでしたが、中隊長から梶野はこの小隊に残れと命令され、私は残ることになりました。これも運命だったんでしょう。実はこれより少し前の夜中、私は部隊本部の連絡役をやらされました。その時は何も見えない中、敵中を通して部隊本部を探し出し、大役を果たしました。それがあり、中隊長は私が無事任務を果たしたということで、小隊に残してくれたんだと思います。

午前4時頃になって、少し明るくなってきた頃、山の下の方がざわざわしたので見ると、兵隊が動いているのがわかりましたが、敵か味方かわからなかったので撃つことができませんでした。そうすると、向かいに同じ高さの山がありましたが、そこから夜明けと同時に一斉にこちらへ向かって撃つてきました。敵でした。私たちはそれに気を取られ応戦をしていましたが、その間に敵の半分が麓に登ってきていたのです。それが見えた時には、もう私たちの50メートルほど前に来ていて、こちらへ手榴弾を次々と投げてきました。その結果、私を

ふくめそこにいた34名のうち、16名即死、6名負傷で私が一番重傷でした。それでも私はその時歩いていました。

馬場：新四軍の中に民兵はいましたか。

梶野：その時民兵はいませんでした。民兵の話が出たので申し上げますが、終戦の一月前くらいだったと思いますが、滌県と宿県の間で一晩に40キロメートルもの線路が奪われました。これは民兵を総動員してやったものと思います。

馬場：それはいつ頃に起きたことですか。

梶野：終戦の少し前です。昭和20年の8月早々です。

広中：先ほど、6発弾が当たったとおっしゃっていましたが、腹と足以外にどこを撃たれたんですか。

梶野：腹と足以外に肩とメガネの縁に当たりました。メガネは後ろに3メートルくらい飛ばされましたが戦闘に夢中で気づかず、応援に来た友軍が「梶野、顔が血だらけだぞ」と言わたので、顔に手をやったらメガネがないことがわかりました。

三好：ほんの少しずれていたら、大変なことになっていましたね。

梶野：そうです。(葉莢入れの写真を示し)、ここにも弾が当たりました。



原隊復帰後の梶野氏
(ベルトについているのが葉莢入れ)

この白いところが弾の通った跡です。この葉莢には弾が30発入っていました。払暁、部落に突入した時、塹を沿って進んでいたら、角で敵兵とぶつかってしまい、敵がカバンをぶつけて逃げたので追いかけていましたが、道が複雑で見失ってしまいました。しばらく進むと、レンガの崩れた塹があったので、ここを越えて行ったと思い、塹に足をかけたところ、その下に敵が隠れていました。私は足場が悪かったので、下を見ながら足をかけたので隠れていた敵の軍服が見えました。足をかけた瞬間に撃たれましたが、私は動物的感覚でそれをよけました。一

瞬遅れたら体を抜けていたことでしょう。撃たれても体は痛くありませんでしたが、顔がとても痛く感じました。それは、弾を発射する時使う火薬のガスが顔にあたり、火傷したからでした。

その時6発弾が当たっていますが、そのうち1発は腹に受けました。普通軍隊では腹に弾を受けたら99パーセント助からないとされ、軍医もめんどくさい手術なんてする必要なしと見放しました。それから20日ほど経ったら弾が自然と皮のところまで出てきたので、軍医にいつて弾を出してもらいました。それからすぐ退院することができましたが、弾が入ったままの20日間は死んでしまうのではないかと布団に入るのがとても恐ろしかったです。ところが、弾が取り出され退院でき、明日は確実に朝が迎えられるという気持ちになったとき、どこからともなく「おまえはまだやることがある。長生きしないといけないよ」と声が聞こえました。これはただの空耳だったかもしれませんが、私はこれを取って「天の声」と信じ、私はまだやる仕事がある、そのために生かされているんだと思うようになりました。90歳を越えた今もその思いでやっています。

滁縣にて：治安宣伝係

梶野：さて、私は昭和17年3月1日付けで満期除隊になり、これで帰れると思って喜んだのもつかの間、翌日臨時招集の赤紙が来て、伍長として原隊で勤務すべしと命ぜられました。そして、治安係として目を付けられていたこともあり、今度は部隊本部のある駅の警備隊長をやることになりました。

三好：それが滁縣ですか。

梶野：はい。滁縣駅の警備隊長です。そこは部隊の看板となるところで、部隊長はもちろんほかの部隊の将校もやってきたため、ここの勤務状態が中隊の職務状況の目安となりました。そのため、私はここの警備につくにあたり、この人間は部隊本部にいれても問題はないかと人物考査をされていました。正式に部隊本部勤務についてはその年の夏でした。

三好：入院していた時、前線には出ていませんし、仕事もしていらっしゃらなかったと思いますが、軍歴上はどう換算されていたんですか。

梶野：結果としてゼロでしょうね。ゼロですがあいつは見込みがあるという事で、目をかけてくれました。戻ったら兵長として分遣隊長に任じられました。同年兵の中では一番早く分遣隊長になりました。しかし、下士官志願はしていなかったの、満期除隊になればすぐ帰れるはずでしたが、除隊してすぐ部隊から連絡があり、伍長として任官すると言われました。そして、本部に行く本部付にされました。普通は本部に行っても部隊本部出向という扱いにされ、もし何か問題があったらすぐほかと交替させられるようになっていました。しかし、私は本部付で籍が本部に置かれたので、簡単には替えられないわけです。私のような立場のものは、普通歩兵でふたりぐらいいましたが、通常下士官志願しないような兵は軽く見られていたので、そんな立場になれるはずはありませんでした。下士官志願した場合、教導学校に行ったりして、1年半教育を受けなければなりませんでしたが、私はたった2ヶ月半しか受けてなく、部隊の指揮なんてとれませんでした。

それにしても、本部付になってよく怒られました。変わったことをしていたので兵隊らしくない兵隊だと言われました。でも今になってはそれが誇りです。

三好：臨時召集の場合、年限は決められていなかったんですか。

梶野：いつ戻れるのかわかりませんでした。ある時、中央で参謀をやっていたのが私たちの部隊にやってきたことがあります。名簿を見て「この部隊は古い兵隊がたくさんいるな」とびっくりしていました。私は3回くらい戻るチャンスがありましたが、サイパンが玉砕したとか、硫黄島がやられたとかいろいろあって、結局ずると大陸に残ってしまいました。恐らく私は志願していない兵隊で一番長く大陸に残った兵隊だと思います。

広中：そもそも、梶野さんが情報に携わることになったきっかけは何でしたか。

梶野：私は初年兵の教育が終わった後、昭和16年5月までずっと作戦要員として活動していました。部隊には作戦要員と守備隊要員というのがありましたが、戦場に行ったら作戦要員でなければ出世できませんでした。作戦要員には落伍されたり病気になられたりしては困るので、



四河子鉄道警備隊



警備車輛

丈夫な人が選ばれ、体の調子の悪い人とか弱い人は守備隊に勤務し、さらに素行の悪いのは分遣隊に回されました。分遣隊に行ったということは進級が二つ星から上がらないというレッテルが貼られたようなものでした。私は弾を受けていて、行軍ができないということで、最初は分遣隊に送られ、分遣隊長となりました。

その分遣隊は私を含め兵士6名で、4キロメートルくらいの鉄道を守備しました。線路から500メートル先を行くともう敵陣区域だったので、とても恐ろしかったです。おまけに私たちが守っていたところには敵の通路があり、その近くの線路は地雷によってすぐ爆破されました。津浦線の中でも一番爆破されていた所でした。こんな所には命がいくつあっても足りないと思いましたが、その時にはもう6発も弾を受けてもう死んでも当然でしたので、あきらめて守備につきました。しかし、少なくとも敵の情報を得るためには付近の住民との繋がりを持たないといけないと思い、周辺の集落の宣撫工作を始めました。

最も効果があったのが、日本の薬を持って行って塗ってやることでした。住民は漢方薬を買うようなお金を持っていなかったのに、傷口に草を貼ったり、木の葉っぱを貼ったりしていました。漢方薬を持っ

ていない彼らは西洋の医学で治療してもらうなんて夢のまた夢だったので、日本兵が使っている薬を非常にほしがっていました。私は中隊の医務室に行き、衛生兵に頭を下げて薬をもらいに行きました。医務室には宣撫用のマーキュロクローム、つまり赤チンですがそれを薄めたものがあつたり、水あたりを治す正露丸や脱脂綿、消毒用のアルコールとか、皮膚病に効く軟膏がありましたのでそれを集めてきて、住民に使ってやりました。すると、住民たちはそんな薬を使ったことが一度もなかったので、たちまち治ってしまい、彼らは治ったお礼といって卵とか鶏とかを喜んで持ってきてくれましたが、私はお前らが治ってくればそれでいいといって受け取りませんでした。そうしてしばらくすると、その評判が敵地区まで広がって、敵地区から泊まり込みでやってくる者もいました。

ある時、皮膚病がひどくなって、すねから下の皮がめくれて真っ赤に化膿してしまった住民がやってきました。化膿した部分からは膿が流れ出ていてひどい状態で、家族からもあっちいけ、あっちいけと気持ち悪がられていました。私は嫌がるわけにはいけませんでしたので、いすに座らせ、膿をきれいに消毒して薬を塗ってやりました。ところが包帯がなかったので、持っていた三角巾を半分に破って縛ってやりました。すると、これまで彼らは真っ白な布で包帯をされたことがなかったのでも感激したらしく、村長が感謝にかけつけてくれました。その村長は「我々は今まで革命、革命といって戦争が続き、最近日本と戦争が始まり、農民はほったらかしでひどいものでした」と



住民への医療活動

話してきました。ちょうどそこは南京から50キロほど離れた所で、徐州作戦の時に部隊の待機場所となっていて、その間に日本軍はかなり強引なことを行っていたようで、彼らから恨みを買っていました。

村長は、「日本軍はとんでもないやつらだと思っていたが、梶野さんは人のいやがることを率先してやり、それも大切な布を使ってくれました。もちろん患者本人は感謝しているが、見ていた村人全員が感激しました。これまで梶野さんはいい人と思ってはいましたが、まだ疑っていました。しかし、これからは本当の友達としてお付き合いしましょう」と言ってくれました。

この一件があって一番変わったのは、いままで私と仲間を連れて村に行くと、共同井戸の周りで洗濯とか洗いものをしていた女たちはみんな怖がって家の中に逃げていっていたのですが、そのことがあってから平気で洗いものを続けるようになったことです。私はその奥さん連中と話をするには何かあげなければならないと思い、酒保から化粧石鹸を15個くらい買って行って、奥さんたちにこの香りのいい石鹸を使って旦那を喜ばせてあげなさいと冗談を言いながら、一個ずつ配ってあげました。その時、最後に並んでいた女の人にあげようとして顔を見たところ、若い娘だったのでびっくりしました。普通田舎で若い娘が日本軍の前に現れることなんてあり得ないことでした。あまりのことに私がびっくりして石鹸を渡せずにいたところ、奥さん連中から「梶野さん、顔が赤くなってるよ」とからかわれました。このことでみんなの緊張が解け、奥さん連中から「梶野さん年はいくつだ」、



洗濯に来た女性たち

「梶野さん奥さんはいるのか」とか、色々聞かれるようになり、こちらが困るほどでした。

そのようなことがあったある時、正月過ぎだったと思いますが、歩哨が遠くから10人くらい女性がこちらにやってくると報告してきました。女性が兵営にやってくるはずないと思って

外に出ると、確かに女性がこちらに来ていて、よく見るとその奥さん連中でした。何の用事かと聞くと、あなたたちの服の洗濯に来たとのことでした。突然のことで兵隊たちはびっくりしましたが、私は洗濯物を何でもいいから出すよう命令し、奥さんたちは慣れた手つきで洗ってくれました。奥さんたちの中には、この前来ていた若い娘もいました。私たちのところは、何せ中隊の中でも札付きのやつらが集まっている部隊ですから、狼の中に羊が迷い込んだようなもので、兵隊たちが娘に何かしないかとひやひやしましたが、何も起きず安心しました。奥さんたちが帰ったあと、兵隊たちは、梶野さんは村で何を宣伝してきたのかと感心されましたが、それだけ奥さんたちから信用されたわけです。

その頃、春節だったので敵は動きませんでしたが、それが終わると案の定動き出しました。私たちは陣地を作り直したりして襲撃に備えていましたが、ある日夜襲をやられました。私たちは6名しかいなかったもので、大勢で来られたらひとたまりもありませんでした。もし一個所から攻めてきたら、こちらは擲弾筒とか軽機など兵器では勝っていたので問題はありませんでした。四方を囲まれてしまったら、死角を突かれてやられてしまうので、敵が分散しないよう気をつけながら応戦を続けました。戦いが始まってから30分くらいたったかと思いますが、東の方から「わー」という大きな声と銃声がありました。それを聞いてわたしはあれっと思いました。もし、味方の日本軍が応援に来るなら、北の方から線路伝いに来るはずだったので、東の方から来るのはおかしいと思いました。しかし、敵は日本軍が応援に来たと思って逃げていきました。銃声の主は一体誰だろうと思っていたところ、鉄条網のところから私のことを呼ぶ声があり、見たところ例の村長でした。梶野さんのところが襲われているから村の人を集めて応援に来たとのことでした。村には弾の出る銃はあまりありませんでしたが、音だけ出る鉄砲はありました。その地域は以前から馬賊が多いところで、襲われないためにみんな持っていて、彼らはそれをバンバンと撃ってくれました。中国の集落の人たちが助けに来てくれたんです。嘘のような話ですが事実です。

三好：その時攻めてきたのは新四軍でしょうか、それとも国民党軍でしょうか。

梶野：新四軍か国民党の遊撃隊です。たぶん、国民党の遊撃隊だと思いますが、正確にはわかりません。こちらは大きな音の出る擲弾筒を使っていたので、敵は容易に近づいて来ませんでした。そうしている間に、バンバンと集落の人が撃ってくれたので、敵は逃げていきました。分遣隊の隊員も村の人が助けに来てくれてびっくりしていました。

それから一週間あとぐらいですが、毎日私たちは夜中の1時までと5時までの間に一回ずつふたりで4キロメートルある鉄道を巡察していて、その日夜の11時頃、春田というのと巡察に行こうと出たところ、東の方でものすごい大きな音がして、30メートルくらいの火柱が上がりました。これは鉄道がやられたと思い、走って行ったところ、走っても走っても現場がありませんでした。結局自分たちの警備範囲の境界まで行きましたが、何もありませんでした。境界の向こうは南京の第十五師団の管区でしたが、その方を見たら、40メートルから50メートル先にレールや枕木が散乱していました。自分たちの管区が無事だったということでほっと胸をなで下ろして帰りました。しかし、私は出発する時に爆破のことを中隊本部に電話するよう命令しておいたので、中隊長がモーターバイクで分遣隊に来ていました。私が歩いて戻ってくると、中隊長から「梶野、何をのんびり帰ってきてるんだ。爆破はどこだ」と叱られました。爆破は管外の4、50メートル先ですよと答えたので、中隊長はモーターバイクをとばして自ら見に行きました。

馬場：それはいつ頃の話ですか。

梶野：昭和17年の2月です。

私は住民と部隊とが仲良くするために色々努力しました。その甲斐あって、段々と住民がなついてきました。ある時、部隊が中国軍の討伐から帰ってくると、住民たちが日本の旗を振って出迎えてくれました。それを見て兵隊たちは日本に帰ってきた気分になり、以前私をからかった将校連中も、梶野はよくやっていると漸く私のことを理解してくれました。



部隊長の凱旋

馬場：日章旗を持っているのはみんな中国人ですか。

梶野：はい、そうです。

馬場：（部隊長と県長〔知事〕、商工会長が写っている写真を見て）部隊長は大隊長ですか。

梶野：大隊長です。中佐です。（写真を指さしながら）これがボス、商工



左より県知事・汪政権大隊長・
日本軍部隊長・商工会長

会会長です。昔の軍閥のひとりです。これは知事ですが、商工会長の方が威張っていました。軍閥の名残です。よかったのは、私は商工会長に息子みたいにかわいがられていました。

馬場：商工会長の名前はわかりますか。

梶野：黄と言います。下の名前

は忘れしました。彼は昔の軍閥で、商工会長という肩書きでしたが、県知事の首をすぐ切れるくらいの力を持っていました。

三好：こちらのきれいな服の方はどなたですか。

梶野：これが県知事です。

三好：これは国民政府の服ですね。

梶野：こういう写真を向こうの人がわざわざ撮って私にくれたんです。私はこういうことをして我々におもねる必要はないと彼らに文句を言いました。

三好：この写真を撮られたのはいつごろですか。

梶野：これは部隊長の誕生祝いの時に撮られたものなので、昭和18年の春ごろです。

三好：そうですね。着てるものが春物ですね。知事が着ている服は汪政権の軍服ですね。

梶野：汪政権が南京にできたのが1940年の3月で、私が入営したのが40年で、部隊本部勤務になったのは42年だったので、この頃はちょうど自治体が組織化して強化されていった非常に大事な時期でした。その頃、私たちの部隊長は大東亜共栄圏の建設だとやかましく言っていました。侵略しておいて大東亜共栄圏とは何だと思ひ、私は私なりの共栄圏的な考えでいろいろやりました。

私はとにかく、占領軍であることを頭から抜き、同じ人間だという考えで臨みました。どうしても占領軍という意識では上から押さえ込むことになってしまいます。私は同じ人間として農民でも県知事でも同じ立場で平等に接しました。そのおかげで、みんなから梶野は威張らないと評判になりました。中国の人は面子を重んじるので、その点からも私の態度はよかったと思いますし、相手に無理なことも言いませんでした。

ある時、中国側の要人が南京の中山陵を参りたいと言って、20人くらいの団体を作りました。南京に行くには揚子江で連絡船に乗らないといけません。船には日本の憲兵がいて体から荷物まで全部調べ上げるんです。要人たちはそれがいやで、いつも部隊長に「梶野を貸してくれ」と言ってきました。部隊長も理由を知っていたので、私に

出張命令をくれました。命令を受けて私が先頭に立って連絡船に乗ると、何事もなく通ることができ、要人たちもニコニコして私についてきました。そのあと、みんなで中山陵を参り、たまたまバスに乗って出かけようすると、憲兵がズカズカと入ってきました。私は奥の席に座っていましたが、私のことがわかると憲兵はすぐ「ご無礼しました」と敬礼をして降りていってしまいました。それを見たみんなは、「やっぱり梶野さんを連れて来てよかったな」と喜んでくれました。さっきも言ったように、私は威張りもせずにおねだりもしなかったので、相手からすれば付き合いやすかったと思います。また、人間同士人格を尊重して接していたので、向こうも私をつれていっても苦にならなかったはずです。このほかに、上海の商社から発電器を買ったときも、商工会にお願いされて一緒に上海までお供しました。こういう大きな仕事でも呼ばれるということは、私が彼らから信頼されていたからだと思います。こういうようなことがありましたが、昭和18年夏私は宿県に移りました。



南京中山陵にて

ありました。満洲は特務機関として残りましたが、中支は連絡事務所と名前を変え、その人が政治問題を指導していました。私は県知事が動きやすくなるように環境を作りました。

馬場：物資搬入は担当していたんですね。

梶野：はい。物資搬入の窓口はやっていました。

馬場：物資は農民個人が持ってきたんですか。

梶野：いや、商工会を通してです。商工会の下には綿布組合などがありま

馬場：梶野さんは県知事など現地の高級幹部と接していますが、中国側でよく接触された窓口はどこでしたか。

梶野：中国側の窓口は特別にありませんでした。私は軍人が政治問題に関与してはいけないと思っていました。当時は特務機関というのが

した。穀物を出して綿製品やタバコ、マッチなど雑貨を入れました。小さなものは扱わず、貨車を使ってやりました。駅で支払いをやりました。

馬場：農産物はどうしましたか。

梶野：農産物も入れました。麦の買付などもやりました。そもそも滌県というのは付近の穀物の集散地で、市場がありました。私は市場に物資を持ってきた農民が襲われないように気をつけ、なるべく物資が安全に運び込まれるようにしていました。

いろいろな物資が入り出していたので、三井物産、三菱商事、安宅産業などの日本の商社が部隊についてきました。そして、将校連中を接待して儲けようとしていましたが、搬入手続の判は私が持っていたので、商社の思うとおりにならず、将校からよく怒られました。私は何でも平等にやらなければならないと言って、将校の言うことを聞きませんでした。私は日本の商社でも中国の商社でも平等に判を押ししました。それにしても、どこにでもついてくる商社のエネルギーには感心しました。

三好：中国の商社とはどこですか。

梶野：組合です。



商工会長と梶野氏

馬場：綿布組合ですか。

梶野：綿布組合もありました。(写真を指さし)、これが商工会長で、綿布組合の組合長でした。ある時、商工会の連中が何かの記念で中国の要人を呼んで琅琊山の豊楽亭で一杯やったとき、要人が「梶野がいないが、どこに行った」と探したそうです。その時、私は山の上で警備をしていました。そこで要人は私の仕事が終わるまでわざわざ待っていてくれて、私と写真が撮りたいというので、一緒に撮りました。そういう関係だっ

たので、終戦になってすぐ、私は彼らと連絡をとろうと思いましたが、そういう連中はみんな漢奸となってオミットされてしまいました。だから、私はなるべく迷惑がかからないように、静かにしようと連絡しませんでした。

三好：中国側の情報についてお話し頂けますか。

梶野：当時、共産党がいたところでは春耕工作というものがありました。合作社が農具を持って来て、兵隊が土を全部耕してしまいます。百姓はそれを見ているだけです。その後、夏取工作があり、兵隊が全部麦を刈ってしまいますし、秋には秋取工作をやりました。この時も百姓はただ見ているだけです。さらに、農閑期の冬には冬学運動があり、徹底的に夜学が行われるわけです。その時、住民たちに共産党はこういことをやっていますと教えるわけです。それで住民に、もし共産党のことがわかっていたら民兵になっていただいて、共産軍の後についてきてもらいたいとお願いするわけです。

三好：今お話しした春耕工作や秋取工作のことは、どこでお知りになりましたか。

梶野：貼ってあったり住民に配られていたビラで知りました。私は情報をやっていたので、スパイを使ってそれらを収集していました。減租減息工作のことも知っていました。当時、中共は優秀な人を下部団体に置いていました。住民と直接接触するからです。

馬場：スパイを使って情報を集めるとおっしゃいましたが、これは現地に行って集めたのですか、部隊にくっついて集めたのですか。

梶野：色々です。前の人の申し送りのものもありましたし、自分が見つけて集めたものもありました。色々調べているとくっついてくる奴がいましたが、それらは油断なりません。向こうと繋がっているのがいましたので。笑い話みたいになりますが、終戦後も私はまだ組織を持っていて情報を集めていました。そうすると、部隊長から南京の軍司令部の飛行機が敵地区に不時着して偉い人が行方不明になったから探せと命令があったり、徐州の北の炭坑にいた在留邦人 3000 名あまりが終戦後行方不明になったので、参謀長から調べると指示されたりしました。そんなことをしていたら、ある時、中共軍から手紙が来て、将校

として優遇するから中国に残れと誘われました。結局、私が使っていたスパイが中共と繋がっていたのでそういう手紙が来たわけです。

広中：スパイとして使っていたのは全て中国人ですか。日本人はいませんでしたか。

梶野：全員中国人でした。スパイは大体向こうと繋がっていたので、私はひとつだけの情報は信じません。あちこちから情報を得て、それをどう判断するのが情報係の仕事でした。また、スパイは怪しいと思っていたので、私の方から大事な情報は教えませんでした。でも、大体分かっています。事前はどこに行くというのも、具体的なことは言いませんが、編成表が出て色々装備を渡され、それを見て今度の作戦はどれくらいかかるというのが兵士でも分かりますし、出発する方向から大体この辺りに行くのかというのが見当つきます。こういうのは機密事項でスパイたちに漏れることはありませんが、彼らは大体分かっていました。それと、作戦に出る時には人夫を使いました。大体一個中隊で予備弾薬とか食糧を持たせました。一個中隊で20～30人くらい使いました。小さい作戦ではそれより少ないですし、大きい作戦ではたくさん使いました。それによって、その作戦の長さが分かりました。

三好：その人夫はどこで集めましたか。

梶野：人夫頭というのがいて、そこから集めました。面白いことに、日本の戦国時代には寄親寄子制というのがありましたが、それと一緒に、人夫頭は30人と言ったら30人きちんと集めてきました。集めることに、何も苦労がありませんでした。そして、戦場では弾が当たることのあるのに、彼らはきちんと着いて来ました。彼らの着ていた服はぼろぼろでとてもひどいものでしたが、帰る時にはシルクの長い服を何枚も重ね着し、弾薬が無くなって空になった荷台には彼らが部落から奪った物が積まれていました。うまく行けば大儲けできるので、彼らは必死に着いて来ました。

馬場：人夫たちを雇う時、報酬は払いましたか。

梶野：賃金を払います。

馬場：それは何で払いましたか。

梶野：軍票で払います。当時軍票が一番価値を持っていました。人夫頭にまとめて払いました。

三好：梶野さんが、直接、人夫頭に支払ったのですか。

梶野：私ではなく経理係が払いました。お米なども経理が支払いました。

馬場：警備なさっていた鉄道が爆破されたことは、ありますか。

梶野：私は、昭和16年10月末に部隊本部に戻ってすぐ分遣隊勤務を命じられ、それからずっと部落の宣伝工作をやり、17年1月頃に部落の女性が洗濯にやってきて、2月の初めに敵の襲撃を受け、それから守備していた鉄道を爆破をされ、それから10日後くらいにも、また爆破を受けました。この時も爆破された方に走って行きましたが、やはり何もなくて、管外の方を見たら10日前と同じところがやられていました。これはどうも様子がおかしいと思いました。なぜなら、私たちの分掌から1キロメートル半先に敵がいつも横断する道があり、いつもその道のそばの線路が爆破されていましたが、前回と今回は第十五師団管区の道も何もないところを爆破されたからです。いつもと違うところをわざわざ爆破されたのが不思議でなりませんでした。

そこで、いつも行く部落の村長なら何か知っているだろうと思い聞いたところ、村長は口をもごもごして顔色が変わったので、問いただすと答えてくれました。村長によると、爆破のあった日の夕方、村長のところとなり部落の村長がやってきて、うちの部落に来てくれといわれたので行ってみると、中国側の軍隊がいて、村長に今日の夜線路を爆破するつもりだが、日本軍の来ない安全な場所と時間を教えてほしいとお願いされた、というんです。それを聞いて村長はこのままだと梶野さんの守備区域がやられてしまうと思ったが、要求を断るわけにもいかなかったので、村長が自ら案内すると言って梶野さんのところを避けて軍隊に爆弾を仕掛けさせたそうです。村長は私に梶野さんの管区ではなかったが線路を爆破させてしまい申し訳ないといってくれましたが、分遣隊が襲撃され線路の爆破が繰り返される中、部落の住民が私たちに協力してくれたことは大変ありがたいと痛感しました。この時、私はやはり人間同士であれば誠意は通じ合うものだとそこで初めて知りました。そして、これからは真心をもって相手とお

付き合いしなければならぬ、と若いなりに感じました。そしてこの考えを人生観にしようと決めました。



津浦線の爆破（四河子附近）

三好：ところで、そういう村長さんのいる村に対して鉄路愛護村などの名前が付いていませんでしたか。

梶野：そういう名前はありませんでした。

三好：そうですか。それでは梶野さんたちが鉄道を守るといふ任務を村長さんたちが

理解してくれて協力してくれたということですか。

梶野：そうです。特に組織を作ったということはありませんでした。今申してきたように、村長たちとやりあっていたので、軍隊の中で梶野は中国との交渉は上手という評判になりました。

三好：交渉は中国語でやったんですか。

梶野：中国語ではありません。日本語です。これについては前段があります。陳という名の少年がいました。彼はいつもは中隊の炊事場の手伝いをしていて、作戦になると炊事場が暇になるので人夫として従軍してきました。陳がいる時はたまたま私の部隊と一緒にすることが多く、私は彼によく言葉をかけて弟みたいにかわいがり、彼も私を非常に信用してくれました。その後、私が入院し、それから分遣隊勤務になり集落で宣撫工作をやることになりましたが、最初集落に入るとき、集落の前に川があり渡し船で渡らなければならなかったのですが、対岸にいた人を呼んで渡し船をよこしてもらうことにしました。すると、若い人が船を漕いできてくれましたが、こちらへ近づくと、「おい、梶野じゃないか」と、その人が言ってきたんです。よく見るとそれが陳でした。陳は「梶野さんはけがをして内地に戻ったという話だったが、また帰ってきたのか」と聞いてきたので、「実は内地まで帰る予定で上海まで送られたが、またこっちに戻ってきて、今度この四河子というところの分遣隊長になったんだ。これからは集落のみなさんと仲良くしない

といけないと思ってここにあいさつに来たが、まさか陳がいるとは思わなかった。ついでに村長を紹介してくれないか」と頼むと、陳は梶野さんのためならということ、村長のところまで案内してくれました。陳は利口な人間で、兵隊の使ういいかげんな中国語を中隊の炊事場にいたおかげでよく理解していたので、村長と話す時には彼が通訳をしてくれました。

三好：彼は滁県から宿県に移る時まで付き合ってくれたんですか。

梶野：そうです。分遣隊で宣撫工作をしている間はずっと着いて来てくれました。先ほど言ったことですが、洗濯に来てくれた女性は陳が連れて来たんです。私はこの時、「情けは人のため成らず」ということばを実感しました。作戦中、兵隊は陳を「苦力、苦力」と呼んでいましたが、苦力というのは人格を否定するようなあまりいいことばではないので、私はそれを使わず、名前で呼んで仲良くしていました。彼はそのことを知っていたので私に懐き、村長を紹介してくれた時も非常にうまくやってくれ、住民たちにもうまく私のことを伝えてくれました。宣撫がうまくいったのは何よりも陳のおかげでした。そして、このことが中隊本部に伝わり、梶野は中国人と接するのがうまいからということで、部隊本部の治安係として目を付けられるようになりました。

馬場：ところで、当時中国には大刀会や小刀会という住民たちが集まった結社がありましたが、そういう結社に遭遇されたことはありますか。

梶野：いいえ、ありません。幫という組織があったことは知っています。分遣隊にいた頃、私は東の方の集落には行けましたが、西の方の集落は近くてクリークもなかったので行きやすかったですが、そういう組織が集落内にいたので入れませんでした。

宿県へ

梶野：それから少し経った昭和18（1942）年7月、私は宿県というところへ移動しました。しかし、軍の移動は機密事項なので、お世話になった集落の人に挨拶もできませんでした。ところが、昼から移動を始めるとその日の午前11時頃に、集落のナンバー2の人が突然別れ

の挨拶にやってきました。軍事機密がどこかで漏れて、それを聞きつけて来たそうです。当時、私は駐屯部隊とその駐屯地の都市や村、またそこに住む人民との窓口になっていました。肩書きは治安宣伝係でしたが、渉外係です。駐屯部隊と市民とを仲良くさせ、大東亜共栄圏建設の方向へ導くことが仕事でした。そのため、私は絶えず町へ出て、市民と話をしていましたが、町の政治には関与せず、自治体の自主性に任せていました。しかし、経済関係については、弾薬とか麻薬は秘かに入れられては困るので、規模の大きい物資の搬出入については部隊が管理し、私は会計の書類に判を押す担当でした。当時から中国は賄賂の多い国と言われていて、私のところに判子をもらおうと、たびたび賄賂を渡そうとする人が現れましたが、いちいちそれをもらってはいはきりがないので、賄賂は一切受け取らず、正直に申請した者には全て判を押し、少しでもインチキをした者には書類を受け取らないことにしました。そういう態度を取っていたおかげで、だんだん賄賂を渡そうとするものもなくなり、会計の仕事も楽になりました。

昭和 18 年部 3 月、軍曹になり、7 月に独立歩兵第五十六大隊本部付に編入されました。したがって、部隊本部での勤務は昭和 18 年の夏から始まり、さらに移動することになったのは昭和 19 年の夏です。部隊本部にはちょうど一年間いたこととなります。その間にも、今申しました住民との折衝役をやって治安確保にあたっていました。

馬場：部隊本部付になられたあとは前線には出ていらっしやらなかったんですか。

梶野：いいえ、その時も前線には行っていました。

馬場：部隊本部勤務のあとはどこに行かれましたか。

梶野：そのあとは第六十五師団司令部の勤務になりました。そこの参謀長直轄の特別調査班です。それが昭和 20 年の 6 月です。本当は上海の第十三軍司令部にいくはずになっていましたが、私のところの部隊長が梶野は出さないと言って、私が第十三軍にいくのを反対したため転属されませんでした。しかし、逆に部隊長が転属されてしまいとても気の毒でした。その第十三軍には中野学校出身の大尉がいて、その部下として情報を担当する予定となっていました。それもなくなりま

した。

少し遡って、昭和20年の3月ですが、私は曹長になりました。これは特別なことでした。普通志願しなければ軍曹止まりで曹長にはなれませんでした。聞くとところによると師団長の特別抜擢というのがあったそうで、3月1日付けで曹長に任官されたのです。師団で2名だったそうです。私はすぐに、師団司令部に行けといわれました。その時私の配下に着いたのが、その後立命館大学で教授になったり、朝日新聞社の記者になったりしましたし、同文書院の人もいました。同文書院の人は一つ星でしたが、8月1日に来たので名前も知らず、終戦になってすぐ帰って行ってしまいました。

大戦末期、師団司令部は徐州にありましたし、大きな師団でした。アメリカ軍を連雲港に上陸させて日本本土上陸を延期させるという作戦があり、そのための陣地構築をやりましたが、日本の思うとおりに行くはずはありませんでした。

復員

広中：戦争が終わって日本に戻られたのはいつですか。

梶野：昭和21年3月です。

広中：どういうルートで戻られましたか。

梶野：参謀長が「おまえが師団にいるとうるさくなるから、早く帰れ」といって、早く戻してくれました。情報という特殊任務をしていたので、中国から睨まれてうるさくなるおそれがあったからです。案の定、私が徐州を発った翌日に、憲兵が中国側に捕らえられました。師団長が中国側の手が入るというニュースをどこかで得たと思います。徐州を出たあと上海に行って、そのあと博多に上陸しました。

馬場：徐州から上海に出られたのが21年の3月ですか。

梶野：もう少し早かったかと思います。21年の2月かと思います。それからしばらく上海にいました。

馬場：その時、すでに引き揚げ船が来ていたわけですか。

梶野：はい。在留邦人と一緒でした。アメリカの船に乗って帰りました。

三好：その時にこんなにたくさんの写真を持ってこられたんですか。

梶野：これは都合がよかったんです。昭和19年12月に初年兵を受領することになって、部隊長の下士官として名古屋まで行けと命令されました。その際、初年兵の名簿を入れる軍用行李を持っていきましたが、これには「軍事機密」というシールが貼ってあって、憲兵も開けることができませんでした。この中に写真をたくさん入れて持って帰りました。そのおかげで、私は部隊の中で一番たくさん写真を持っています。

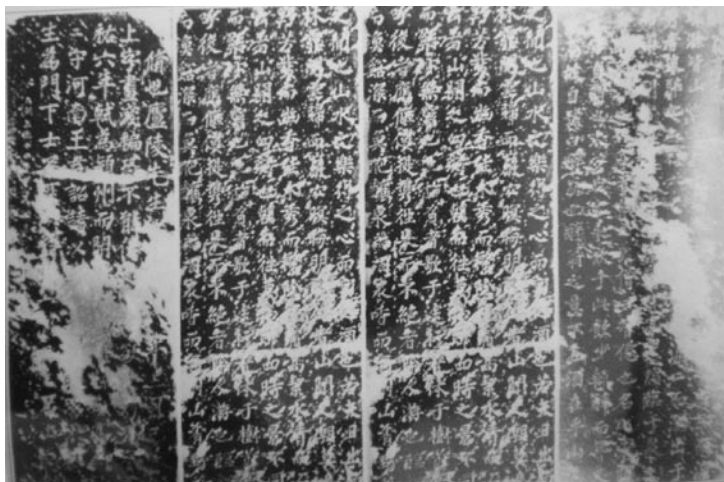
広中：もともと写真を撮ることが趣味だったんですか。

梶野：いや、これは部隊本部の写真班が撮ったものです。私は毎回情報を得るために部隊の先頭にいましたが、私のそばにいればいい写真が撮れるので、いつも私についてきて、撮ったら何でも私にくれました。

徐州では、小学校で住民と合同運動会をして、その時花火を使いましたが、実は宣伝でも花火を使っていました。部隊の中に三河の花火師がいて、花火の中に伝単（宣伝ビラ）を入れたものを作ってもらい、敵の方に向けて打ち上げてもらいました。伝単には表に宣伝文を書いて、裏には春画をつけました。敵は表の方は読まないけど、春画には興味があるので持っていきました。作戦が始まると、花火の弾を石油缶に入れて汗が入らないように封をして、人夫に花火筒を担がせて前線に持っていきました。

後日談：酔翁亭碑のこと

梶野：ところで、あれは琅琊山の酔翁亭にある豊楽亭の碑の拓本ですが、あれは滁県にありました。滁県というのは大体唐の時代にはできていたらしいですから、唐より古い時代にはあったんですね。西晋というのがありましたね。八王の乱で司馬睿というのが逐われて、揚州から建業（後の南京）に入ろうとしていましたが、その時協力したのが王という一族で、その一族の中に王羲之という書道の先生がいました。王羲之のお父さんは寿県というところにいました。そして建業を宣撫できたので入場し、東晋を作りました。私は下士官になってから滁県に部隊本部があったので行ったんですが、その時ある人から「梶野この郊外に瑯琊山という名の山がある」と言われました。しかし、瑯



醉翁亭碑拓本

琊山は山東にあるはずなのに、ここにあるのはおかしいと思って調べてみましたら、そうだったのです。東晋を作ったあと、司馬睿は滁県の山を避暑地としたようで、その山が瑯琊山に似ていたので瑯琊山と名付けたそうです。

私がいたころはその山の寺に醉翁亭の碑と豊楽亭の碑というのがありました。私は碑については知っていましたが、実際にまだあるとは知らず、びっくりしました。その碑文は昔の中学の教科書に載っていたくらいの有名なものでしたが、教科書にはたった一行載っているだけで、全文が載っているわけではありませんでしたので、内容がわかりませんでした。そこで、町の歴史に詳しい人に聞いたところ、これは宋代の大文学者の欧陽脩が散文を作り、蘇東坡がそれを書いたそうです。欧陽脩は科挙の先生をやっていて、蘇東坡はその生徒だったので、彼らは師弟関係でした。それが縁で、この碑ができたそうです。この碑文は、中国では「欧文蘇書」と呼ばれていて、非常に有名でした。そのため、日本の兵隊が大砲でこの碑を壊したと後世の人に言われたいよう守ってきました。その間、将校連中に「おまえは何しに来たんだ。その碑は敵国のものなのに」と、よく叱られました。それ

に対し、私は「ここには日本の文学の源があるんだ。これはアジアのものだから守らないといけない」と言い返しました。

ある時、旅団長が視察に来て、部隊長が碑のある寺を案内したところ、歴史に興味のあった旅団長が碑を見るなり、「これは蘇東坡の書じゃないか」と、参謀や将校たちにしきりに尋ねましたが、彼らは答えることができませんでした。そこで、一番後ろについていた私はでしゃばってはいけないと思いつつ、前に出て「閣下のおっしゃるとおり、蘇東坡です」と答えました。それから先に進んで、酔翁亭で休憩していた時、部隊長から「梶野、閣下にこの寺の由緒を説明しろ」と命ぜられました。そんなことは夢にもおもわず、びっくりしました。当時、軍人というのはとても威張っていて、兵卒の身分では佐官はもちろん、下士官であっても容易に会話することなんてできませんでした。ましてや旅団長は将官で、その脇には参謀が何人もいるところで話をするなんてとんでもないことでした。しかし、そこで閣下のお墨付きをもらえば、碑の保存ができると思ったので、覚悟を決めて知っている範囲のことを全て話しました。そうしたら、閣下は私を褒めてくれてお墨付きをもらい、碑を残してもらえるようになりました。

話は戻りますが、宿県に移動する間にやってきた集落のナンバー2が滁県の思い出にと渡してくれたのが、この拓本でした。碑を守ってくれたお礼としていただきました。私が滁県にいたことを証明できるものは、唯一これだけです。

ところが、田中角栄の日中国交正常化の後、たまたま手に取った本に「日本帝国主義が放火し碑を焼いた」とありましたので、これには意見をしなければと思い、それがきっかけで、再び中国とのおつき合いが始まりました。それは、日本が中国と国交正常化を果たした1972年のことでした。私は名古屋の丸栄で初めて開かれた中国物産展に行きました。会場に行くと習字の本が積み上げられていて、その中に、『酔翁亭の碑』というのがあり、懐かしくなったので買いました。しかし、文章を読んでみると、「日本帝国主義が放火し碑を焼いた」と書いてあり、びっくりしました。焼いたとありますが、現に私が碑を完全に守っていたのですから、そんなわけはありません。もっとも、



醉翁亭

終戦まではいなかったのですが、最後はどうなったのか知りませんが、碑が焼かれてない証拠があります。この写真を見て下さい。この写真に写っている建物の中に碑が四面ありました。碑は横1メートル、高さ2メートルある大きなものです。もし碑が燃えていたら建物が先に燃えるはずですが、写真のとおり燃えていません。そして、私が去ってから滁県は治安がよくなっていたので、日本軍が壊すはずはありません。そこで、私は滁県の県長に手紙を出しました。「私は戦争中滁県に駐屯していた兵士だが、確かに滁県を占

領していたことは市民に対して恐怖と屈辱を与えて申し訳なく、その罪を問うなら甘んじて受けるが、我々部隊は市民を脅したり、物を取ったりした憶えはなく、みなさんの生活の安定のために一生懸命やったつもりで、ましてや文化財については格別にご注意を払って守ってきたつもりだ」と書き、写真を添えて送ったのです。

それからしばらくして、滁県、いまは滁州市と名を改めましたが、そこから、文学者を集めて豊楽亭で開かれる式典への正式な招待状が届きました。私は碑を残しておいてよかったと思いました。ところが、碑は文化大革命の時に紅衛兵に壊されてしまったのです。私は、日本軍は碑を大切に守ったのに、なぜ中国人が自分の国の碑を壊すんだと怒りました。もし、日本軍が本当に碑を壊していたら、中国は立て札を立てて日本の野蛮ぶりを宣伝していたでしょう。壊された碑は1985年に新しく彫り直されたとのことで、私は安心しました。

インタビューを終えて

宣撫工作を中心に、華中における日本軍の占領統治の実態の一端を語っていただいた。話が途切れることなく、しかも時系列に沿っての回想は、聴き手にとって受け取りやすく、整理も容易だった。最後に付け加えた「醉

翁亭碑」についてのエピソードは、梶野氏ご自身の中国との今にいたる関わりのきっかけであり、宣撫工作と無関係であるように見えながら、村落など地域の指導階層である地主層や、古くならば郷紳と呼ばれたひとびとにとって、琴線に触れるものでもあろう。もちろん、一般民衆への医療活動などは、「日支提携」や「共存共栄」などの政治宣伝以上に、民心を獲得する上で有意義であったはずである。

梶野氏が特務工作を行っていた地域は江蘇省と安徽省との省境地域であり、日本によって樹立された汪兆銘南京政権、中国共産党の新四軍、国民政府軍が三つどもえに、より正確には三すくみ状態で、互いに表面的にも、あるいは地下工作を通じて対立と利用を繰り返していた。1941年1月の皖南事変以後、とくに安定的な根拠地を得始めて実質的に抗日民族統一戦線よりも党派の利害を前面に押し出しつつあった新四軍と、汪政権内部にあって重慶と連絡を採りながら行動した勢力や、やはり汪政権内部で共産党の秘密党员として活動していたもの、さらに「幫」の勢力など、この地域では日本軍が占領統治と利害が衝突、あるいは利用対象となるものが錯綜していた⁽⁵⁾。要するに、抗日ナショナリズムやアジア主義、あるいは共産主義や社会主義といったイデオロギーで整理できるほど単純な世界ではなかったのである。そうした中で民心を獲得することは、やはり具体的な営為が必要なのであったし、獲得できたと思っても肝腎なところで摺り損なっていた部分もあったことがうかがわれた。

最後に、今回のインタビューでうかがった事柄のうち、未整理ではあるものの重要と思われる事柄を列举して、稿を閉じたい。

まず、滁縣四河子の鉄道警備隊に配属されていたとき、近くに中国人ムスリムである回民^{かいみん}の集落があったこと、また大運河で荷役などに関わっていた青幫に海軍がコンタクトを取り、利用していたこと、1945年8月10日頃には使っていたスパイから日本の敗戦の情報を聞き、ピラを見せられたこと、またそのころには新四軍の東北への移駐が本格化しており⁽⁶⁾、これもスパイから情報が伝えられていたこと、さらに終戦後、降伏した相手

(5) 新四軍を中心とした、華中の状況に関しては、三好章『摩擦と合作—新四軍 1937～1941』(創土社、2003年3月)参照。

(6) 三好章「新四軍東北移駐試論」(『中国研究月報』第55巻第2号、2001年2月)参照。

である国民政府軍に武器を引き渡したものの、共産党軍がそれを奪いに攻撃をしかけてきたために、国民政府軍が日本軍に再武装を要請したことなど、一つ一つが歴史の転換点であったといえよう。

なお、以下に梶野氏が所持されている写真の極く一部を掲載する。

1. 宣撫工作



ポスター貼り(1)



ポスター貼り(2)



スローガン



医療活動



パレード



村芝居

2. 八路軍殲滅戦、国民政府軍救出



八路軍の遺棄死体



陣地の搜索



国民政府軍將校

3. 南京陸軍病院



病院棟



体内から取り出した手榴弾片

4. 村民と日本兵



5. 汪政権要人



右より二人目高冠吾